「くり返し」のおもしろさ

―〇歳児クラスの生活より―

田辺　敦子

乳児保育に携わっていると、日々の生活の折々に、子どもたちの中にこれから育っていくであろう「遊びの根源」に出会うことができます。「遊びの根源」、そう、幼児期の子どもがいとも簡単に表現している遊びのエッセンスは、幼児期になって突如出現するのではなく、子どもの成長と一緒に、乳児期の頃から、生活や遊びの中で積み重ねられ、徐々に育まれていくものです。

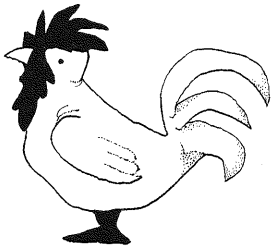
一見単純に感じる乳児の生活ですが、実は、情緒的に安定した環境の中で経験していく、その単純な「くり返し」のスタイルこそが、「遊びの根源」を導き出すヒントの宝庫となっているのです。更に、乳児の「遊び」は、彼らの「生活の中の行為」と非常に密接

な関わりがあるということを日々感じています。

「バイバイ」を味わう

Kちゃんは、生後十一ヶ月の女の子。毎朝、お母さんかお父さんのどちらかと一緒に保育園へ登園して来ます。まだ自分では「おはよう」の挨拶をすることはできないKちゃんですが、お母さんやお父さんに抱かれながら、お父さんたちが保育者とどのような挨拶をし、どのような仕草でやりとりするのかを、じっと眺めています。

私たちは、お父さんたちが保育室を出る時に、「いってらっしゃい、お気をつけて」とお見送りするのですが、その際Kちゃんにも、「パパ（ママ）にいってらっしゃいしようね」といつも声を掛けるようにしてきました。もちろんKちゃんは、まだ「いってらっしゃい」とは言えないので、私たちがKちゃんの代わりに手を振ってバイバイをし、お父さんたちも、それに応えてバイバイをして下さっていました。



すると、いつの頃からか、お父さんたちが保育室から出て見えなくなると同時に、Kちゃん自身も手を振るようになり、続いて数日後には、大人の「いってらっしゃい」「いってきます」の言葉に応えて、手首を返しながらのバイバイをするようになりました。（前者は視覚的に、また後者は言葉そのものによって、Kちゃん自ら「バイバイ」を

するシチュエーションを判断したのでしょう。）そして、そのようなKちゃんの様子に感激した大人の「バイバイできたのね」「素敵ね」という感嘆の声も加わり、いよいよKちゃんも「バイバイ」するという行為の楽しさを覚えたようです。

人とのコミュニケーションの出発点を体験したKちゃんは、それからというもの、誰かがKちゃんの傍から離れるときや大人がおもちゃを片付ける時などにも、「バイバイ」と手を振ってはにっこりと笑うようになりました。「バイバイ」をタイミングよく表現する事に、遊びの要素を見出したのでしょう。きっと、この「バイバイ」を遊びの中でくり返していく事で、これからも様々なバリエーションの「バイバイ」に出会っていくことでしょう。

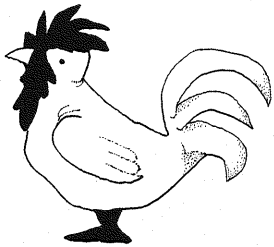
食べたい気持ちに誘われて

私の保育園では、乳児保育における育児担当制をとっています。食事についても、毎食決まった大人（担当保育者）と食べることで、子どもが安心して食事に向かえるようにしています。また、担当制をとることによって、保育者自身、栄養士や看護婦と共に、一人一人の発達段階や、食事の進め方（食事の時間や調理形態、食事の量など）をしっかり確認しながら、その子にあった食事をコーディネートしていけるようになっています。離乳食を進める〇歳児の食事では、一対一の関わりの中で、尚のこと丁寧な食事になるよう心掛けています。

さて、Mちゃんは、私が担当している生後十ヶ月の女の子。三人兄弟の末っ子で、日頃からお兄ちゃんやお姉ちゃんからの刺激を多く受けていることもあって、生活力もあり、遊びに対しても非常に能動的な姿を見せています。

そんなMちゃんは食事面でも積極的で、食事のテーブルに着くと、まず、大人の膝の上に座りながら、テーブルに用意されている食事の方に身を乗り出して、「今日のおかずは何かな？」と、確認します。私は、毎食とも、Mちゃんのこの確認作業が一通り済むのを見てから、Mちゃんに食事用のエプロンをつけて、最後に口と手を拭いてから、「いただきます」をするようにしています。実は、担当者との信頼関係があることで表出される、食事前の一連の行為が、とても興味深く面白いのです。なぜならば、このちょっとした一連の行為の中にも、Mちゃんの成長の姿が見られるからです。

少し前までのMちゃんは、私が言葉掛けをしながら行為を進めていく間、私の顔と食事の方とを、交互に見ながら「いただきます」を待っていました。例えば、「おててを拭こうね」と言葉掛けした後も、私の方から手を伸ばしてMちゃんの手を取り、テーブルの上に出してから拭いていました。もちろん、今の段階では、これが普通ですし、むしろ丁寧な言葉掛けと共に、これらの行為を大事に積み重ねていくことが重要です。しかし、この頃のMちゃんは、もう少し先を見通せる主体的な様子を見せるようになってきました。そ



れは面白いことに、Mちゃんにとって好物揃いのメニューの時や、お腹がとても空いている時によく見ることができるのですが、そういった時は、私の言葉掛けよりも先行して、Mちゃんの方から食事に向かう姿勢を見せてくれるのです。例えば、「エプロンをしようね」と言うとすぐに背筋を伸ばして、エプロンのゴムが首に通りやすいようにしてくれます。また、私がオシボリを手にする前に、口を前のほうに突き出し、手もすぐに拭けるように、テーブルの上にぱっと出して待っていてくれるのです。そして、「いただきます」と言うやいなや、再び体を前に乗り出して、笑顔で体を揺らして「あれが食べたい」と目線や指差しで教えてくれるようになりました。

Mちゃんは、早く食べたいという思いから、行為を省略してしまおうとするのではなく、大人と一緒に育んできた習慣を、今度は自らが参加するという積極的な姿勢で示したのです。今まで積み重ねてきた「くり返し」は、このMちゃんの成長によって、よりリズミカルになり、食事に向かおうとする気持ちも一層高まってきたように感じます。子どもは、食べることが生きることに繋がるという事を、マナーを体得し、社会性を広げていく、このような体験を通して理解していくのでしょう。

この事例は「遊び」とは類を異にしますが、「遊び」も「生活の中の行為」も、子どもがその対象に対して、どのような姿勢で取り組んでいるか、という点で捉える際には、同様のことが言えると思います。この場合のMちゃんの姿からは、子どもが遊びを自分の世界に引き込んで行く時に見られる、心地よい真剣さのような意志の力強さを感じました。

ちなみに、数日前から、Mちゃんは「いただきます」の時に両手を合わせることも楽しみ始めました。ご家庭での、食を大切にする心が伝わってきます。

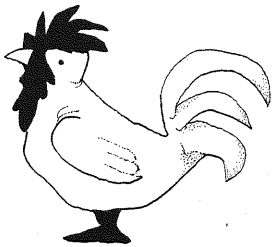
やっぱり落ちてきた！

ゆったりした時の流れる乳児室ですが、わらべうたの遊びを満喫している子どもたちの姿を見ると、一層ゆったりとした心持ちになります。そして、自分がその遊びの中で子どもたちと関わると、今度は、次々に変化していく子どもの表情に感心してしまいます。

子どもたちが大好きなわらべうたのひとつに、こんなわらべうたがあります。とても短く、出てくる音もレとドだけなので親しみやすく、子どもたちが何度もくり返して遊ぶことのできるわらべうたです。

♪うえから　したから　おおかぜこい　　こい　こい　こい！

私たちは、よくこのわらべうたを歌う時に、薄い素材の布を使います。うたに合わせて、子どもの頭の上で布を動かして風を表現します。私はよく、このうたの最後のところで、布を子どもの上にふわりと掛けます。すると、はじめの頃はちょっぴり驚くのですが、何度か試すうちに、子どものほうから先に目を瞑ったり、笑顔をつくったりしながら、布が落ちてくるのを待つようになります。そして、今か今かと楽しみにしている子ど



もたちの期待に応えて、タイミングよく布を離すと、「やっぱり落ちてきた！」と言わんばかりに、全身を動かして反応を示してくれます。すこし慣れてきたら、今度は、布を離すタイミングを変えたり、もっと厚い布や肌触りの異なる布を使用したりして、子どもたちの更なる興味を誘う事もあります。また、このわらべうたを聴きつけて、「私も！」というように近づいて来る子がいる時には、順番に布を掛けてあげます。そうすると、自分の番になった時には、本当に嬉しそうに布を受け止めてくれます。待つ事の幸せや、順番が巡って来る事の喜びを感じとっているのでしょう。

子どもたちは、くり返しを楽しむことで、次のシーンを予想することが可能になり、自分が予想し、期待したことが実現されるまでの、程よい緊張感と、実現されることによる満足感を、バランスよく味わうことができるようになります。そして、そこから子どもたちは安心と信頼の心を得ることができ、その満たされた状態が、新たな好奇心へと繋がっていくのでしょう。

ここに挙げた三つの事例は、どれも日々の保育の中で見られる、ごく小さな出来事のひとつです。しかし、子どもたちにとっては、このような小さな出来事こそが大きな発見であり、重要な経験なのだと思います。私は、これからも、乳児保育に携わる保育者として、小さな出来事に喜びを感じながら、子どもと共に沢山の「遊びの根源」を見つけていきたいです。そして、様々な根源が共存している事に目を向けていきたいです。（かしのき保育園）